

神奈川県知事より表彰されました！

～ 「かながわ感動介護大賞最優秀賞作品」 ～
(平成 24 年 11 月 11 日神奈川県知事より表彰)

「食を忘れてしまった母の脳を目覚めさせる介助法」

ある家族会の日施設長がおっしゃった言葉「椿寿の入居者様は皆私達の家族です。」職員の方も笑顔で頷いていました。

現在九十七歳の母が入居して七年、その間四度の危機がありました。食事水分も摂れなくなりました。

その時の職員の介助を見てとても驚きました。

まず、口を開ける様、頭を撫で、両手で肩を抱き、俯いている顔をそっと覗き名前を呼ぶ。

「僕の顔を見てごらん。少しだけお昼ご飯食べようか。ゆっくりで良いよ。」

顔を上げる母に

「顔を見てくれて有難う。美味しそうだね。口を開けてくれる？」

少し口を開けた母に、ほんの少しだけ口に入れる。

「もぐもぐして。ゆっくりで良いよ。上手だね。」

と繰り返す。やっと飲み込んだ母に、肩を抱き額と額を合わせて

「食べてくれて有難う。」

後ろで見ていた私の身体は硬直し、娘の私が何もできないことを恥ずかしく思い涙をこらえていました。

最近も発熱し、食事が摂れなくなりました。体にとても良いと言われているお猪口いっぱいのお豆あんこを出していただいたり、四苦八苦しながら、母が自力で食べられたときは、職員さんの喜ぶ声が廊下中に響き渡りました。

このような介助で幾度も母が元気になったことを思い返しました。

「十分でも一時間でも一日でも長生きしていただくことが私達の仕事であり願いなのです。」

という施設長からの言葉をいただき、年老いた私達家族も元気に、明日を明るく楽しく頑張れるのです。

「母さん、頑張れ頑張れ。」

心から感謝、感謝、有難うございます。

～審査員からの講評～

高齢のために嚥下機能が衰えていく現実と、難しい食事介助のエピソードから、介護職員による介護の手順や動作、気遣いまでもが伝わってくる作品でした。

人生の最後の時期を、勝ちある日々として送れるよう支援することも介護の使命です。そして、施設長を中心に介護の目的に向かって努力する介護職員の思いを、母親への介護をとおして感じ取った、家族の方の率直な感動と感謝の思いが伝わってきました。

～椿寿から～

入居されているご家族様から頂いたお手紙をそのまま送りましたところ、最優秀賞を頂くことができました。

ここに書かれている様なやり取りは日々の椿寿の様子でもあります。

施設長ビジョンである、寄り添う介護、自分や家族を入居させたい施設にするという思いを全職員が同じ気持ちで一丸となり、頂くことのできた賞だと思っております。私達も、数多くの施設がある中、椿寿に入居され、私達にいつも笑顔をいただける事に感謝いたします。